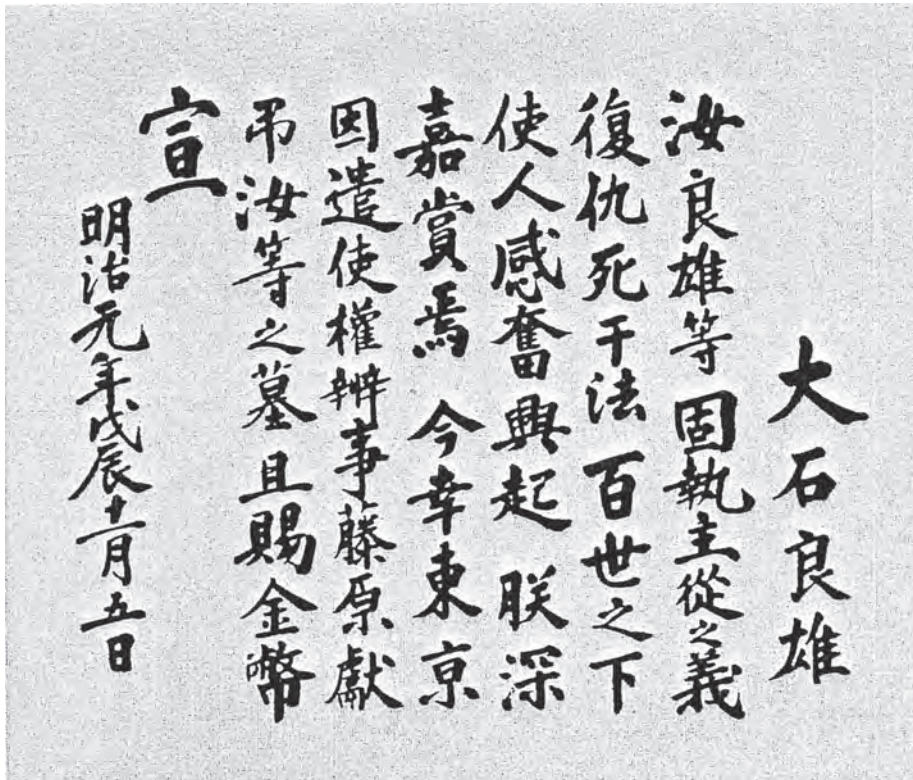


全ては明治天皇の「宣」から始まった



NPO 法人

忠臣蔵倶楽部会報

発行人
〒135-0047
東京都江東区富岡 1-17-1-403
忠臣蔵倶楽部
TEL&FAX 03-3630-1927
編集者 中島康夫

ホームページ
忠臣蔵会館
出版・校正・協力
テレビ製作協力
講演・史跡案内
<http://www.chuushingura.net/>

「元禄赤穂事件の記録」
定価 2200 円
(消費税含)
送料 350 円
048-973-3777
郵便局の払込票をご利用下さい
中央義士会
00130-0-54568

大石良雄 汝良雄等 固執主従ノ義ヲ執リ 仇ヲ復シテ法ニ死ス 百世ノ下 人ヲシテ感奮興起セシム 朕深ク嘉賞ス 今東京ニ幸ス 因ツテ權弁事藤原獻ヲ遣使シテ 汝等ノ墓ヲ弔シ 且金幣ヲ賜フ 宣 明治元年戊辰十一月五日

大石神社「義士銘々伝」より

中島康夫

明治元年 11 月 5 日、明治天皇は一度皇居に入られてから、勅使藤原献を派遣して、泉岳寺境内の大石内蔵助らの墓前で大石らを讃える「宣」を読み上げた。

時代は慶応から明治へ移り、これからの明治時代を治める意味で岩倉、三条らは赤穂義士の忠義を利用した。この日より旧幕の「赤穂浪士」は晴れて「赤穂義士」になったのである。この「宣」は、日本国民の 99%には



それなりの効果はあったと思うが、残る1%の国民、いわゆる愛知県旧吉良町（西尾市）の町民には最高の痛手となった。新政府の敵であった徳川らへの思い、外敵の朝鮮らへの思いは、全て旧幕の佞奸吉良上野介らへと刃は向けられていったのである。

困ったのは、旧吉良町の町民である。何も悪事を働いた訳でもないのに、罪もないのに、町民の生活に多大な影響が押し寄せてきた。町民は、吉良町以外では働きにくくなり、吉良町出身とは言えなくなり、やむをえず三河出身を名乗っていた時代が昭和の初め頃まで続いた。このような吉良町不利の状態は、現在の町民の祖父母の方々は充分知っているはずである。

筆者も、以上の吉良町の苦境は、吉良町を訪ねた時に、町民から直接何度も聞かされた。

吉良町の方々には大変気の毒と思うが、そんな状態が昭和35年頃までは続いていた。

戦後、忠臣蔵の上演と放映が禁じられた時期もあったが、やがて昭和39年、爆発的な人気を誇ったNHK大河ドラマ「赤穂浪士」が放映された。この人気は逆に吉良町の「役場の方々」にも何がしかの暗示を与えたのである。観光客が少しずつ吉良町にも足を運ぶようになっていったからである。

これに乗じたのが当時の「吉良町役場」の方々である。

そうだ 「上野介様を名君にしよう」

「七面山にも登って三姫の眼病回復を願った」

「赤馬に乗って領内を巡視した」

これらの一文一文に、何の証明もないまま、その「項目」が、出来上がってしまったのである。全て戦後に思い付いたことである。実際には、上野介が黄金堤を作ったのでないことも、故鈴木悦道氏（花岳寺住職）は充分認識しているながら、町のため名君説に同調していた。

上野介は「七面山」にも登っていない。この場合、よし悪しは別にして、江戸城で多忙な上野介が、何日も身体を空けて吉良町まで来て、山登りなど出来るわけがない。

「赤馬伝説」など、明治以降に作り直した玩具に、どうして乗ることが出来るのか、江戸時代に赤馬に乗って村を巡視した史料があるなら公開してほしい。どれもこれも何の真実もない立派な観光偽装である。

その上、近年は、テレビ番組で上野介役を演じた俳優まで巻き込んで、「上野介名君論」を展開している。そんな一俳優に何の知識があるというのか。逆に無学を展示しているようなものである。

更に近年、日本史 汚名返上「悪人たちの真実」（2014年12月18日放映）等の番組が流され、無知な作家が出演して、無教養・不勉強をさらけだしている。

笑うではないか。番組の中で、吉良町史跡保存会会長などが、空手で吉良名君説を力説しているシーンが流れているが、口で言うだけでなく、江戸時代に上野介が名君であった史料を示し



大石内蔵助の墓前で「宣」を読み上げる勅使

てほしかった。もっとも、上野介の名君を証明する史料などこの世に存在しないのだから口でカバーするしかないのだろう。

更に番組は続き、吉良町（現西尾市）の女性の学芸員は、赤穂義士の討入りを「あれはテロだ」と放言していた。正に言いたい放題である。

松之廊下事件を「通り魔にあったと同じ」と放言するなど、上辺では赤穂市に近寄り、陰では「内匠頭をバカ呼ばわり」している。この現状を赤穂市側も把握すべきである。だいたい「忠臣蔵サミット」などに加盟させるべきではなかったのである。

但し、筆者は、無闇に争いを好むものではない。では、どうすればよいか。全て史実に従えばよいのである。吉良町の方々がどこまでも史実をねじ曲げるならば、我々もどこまでも事実を叫びつづけなければならなくなる。

上野介は、自分の妻（三姫）に松之廊下事件後「あなたは、自殺しなさい」と言われた男である。そんな男がどうして善人といえるのか。身内の妻ですら、松之廊下の詳細を知って、どちらが悪いかわっていたのである。

上野介が善人でない証拠、つまり学問的事実証明は、近年多々存在していて、我々もその資料の写しは手元にある。

例えば、秋田県公文書館蔵の元禄事件後に書かれた「岡本元朝日記」（秋田佐竹家家老岡本元朝記録）には「吉良殿日頃かくれなきおうへい人間、又手の悪き人にて、且物ヲ方々よりこい取被成候事多候由」つまり、人の家に行っては無理に骨董品を持ち帰る悪い人だと言っているのである。

更に、上野介は賄賂の少ない大名には、いじめをしていたこと、つまり、毎年「大名いびり」をしていた事を佐竹家の史料は示している。

そして、元禄14年3月15日には、勅使は増上寺参詣を予定しており、そのため、13日～14日は晝表替えの事があったことを伝えている。その他、上野介の悪人ぶりは、下記の史料にも沢山示されている。

- 「堀部金丸私記」 著者 堀部弥兵衛
上野介が内匠頭に発した悪口の意味が示されている。
- 「系図附録」 著者 大石庄司
上野介の松之廊下のいじめが決定的に示されている。
- 「沾徳随筆」 著者 水間沾徳
内匠頭と上野介の衝突の原因の一部が示されている。
- 「岡本元朝日記」 著者 岡本元朝
上野介の悪行の数々が示されている。
- 「陽和院書状」 著者 陽和院
上野介の性格の不良性が示されている。
- 「赤城盟伝」 著者 前原伊助
上野介の悪行を感じ取っていた義士の直筆。
- 「江赤見聞記」 著者 落合与左衛門
内匠頭と上野介の不仲についての聞書。
- 「四十六士論」 著者 佐藤直方
内匠頭と上野介を双方共批判している。
- 「大高源五書状」 著者 大高源五
内匠頭の乱心を否定する文章あり。
- 「鸚鵡籠中記」 著者 朝日文左衛門
上野介のいじめについての聞書。
- 「徳川実紀」 著者 成島司直ら
内匠頭と上野介双方の性格の記録有り。
- 「赤穂義人録」 著者 室鳩巢
松之廊下における事件直前の様子が示されている。
- 「冷光君御伝記」 著者 広島浅野家
上野介の性格の悪さが記されている。
- 「金瘡部（道有日記）」 著者 栗崎道有
医師により内匠頭が乱心でないことが証明されている。
- 「削封日記」 著者 千坂兵部高治
上杉四代綱勝の毒殺疑惑が記されている。

- 「米沢史談」 著者 朝績斐
上野介の悪行が綴られている。
- 「貞享規範録」 著者 津軽信政
上野介の横暴の数々が示されている。
- 「易水連袂録」 著者 天野弥五右衛門
内匠頭と上野介の性格が示されている。
- 「赤穂鐘秀記」 著者 杉本義鄰
上野介の悪行の数々が示されている。

上野介は、自分の立場をよいことに毎年、勅使参向の折、日光代参の折などには、自分への賄賂の少ない担当の大名に、いやがらせ、いびり、悪口を浴びせていた。

が、上野介を擁護する作家らはなぜかこの「いじめ」の事実を否認し触りもしない。いわゆる、事実証明ができないほど、専門ではないということである。大体エンターテイメント専門の作家は、歴史学の実事本など発刊しないほうがよいのである。その脳は既にエンタメ化して事実を述べる資格はないのである。偏見と不足な勉強で人々に有害なウィルスを撒き散らさないでほしい。

ともかくにも、我々が示す上野介悪人説の証拠となる史料に一つ一つ反論してほしい。素通りすることと、「そんな事はない」の一言で済まさないでほしい。

申し上げておくと、当会は元禄事件の研究と義士会の看板を挙げている関係上、前提として「上野介憎し」を掲げているのではない。全て、史実通りに動いているだけである。吉良町の方々も、一日も早く、上野介が善政をしていた、江戸城では大名いびりなどしていないという、学問的証明書（一級古文書）を掲げて我々を納得させて欲しい。

よく吉良町の方々が「吉良流礼法」などの一巻を前面に出されてくるが、そんなものは式典の礼法（有識）を示しているだけで、だから名君とは言い難い。いわゆる、そんなものしかない、ということである。名君を主張するなら、上杉鷹山のような、本当に国を思い、民のために実行したたくさんの一級史料がなければならない。

それにしても「義」を重んじる上杉謙信を祖とする名門上杉家が、江戸期の明暦から元禄の間、吉良義冬・義央親子に食い荒らされ、後に藩が瀕死の状態まで追い込まれた時期があったことは実に不幸なことであった。

結果、「義」を重んじる赤穂浅野家の旧臣によって上野介は成敗され、義周（よしまさ）も絶家と追い込まれた。「喧嘩両成敗」で元禄事件は決着を見たのである。

上杉家は、それらの被害の影響も受けて、上杉鷹山という名君が生まれる結果となった。「義」を重んじてきた名家が、江戸期のある時期三河の白アリに食い荒らされ、その白アリを退治したのが「義」に厚かった浅野家とは実に皮肉な話である。

赤穂市講演と

史跡巡りの旅

荻原 栄

平成二十七年十一月二十四日、赤穂市にある関西福祉大学で中島代表の講演が行われるのに伴い、二十五日にかけて赤穂市の史跡を巡る旅を行いました。二十四日の聴講者は富岡克さん、三輪三郎さん、上森茂さん、渡邊敏雄さん、平野智恵子さんと筆者、さらに二十五日の史跡巡りには中島代表の他、丸山裕之さんと坂藤美子さんが合流しました。

十一月二十四日東京を十時五十分発、赤穂に十四時三十五分着、赤穂駅から関西福祉大学のスクールバスで大学へ移動。十六時二十分から中島代表の「赤穂義士を考える」と題した講演を聴講しました。



関西福祉大学での代表講演の模様

四百人入る大学の大讲堂は関西福祉大学の学生が大半で、一般市民も参加したオープンキャンパスのような雰囲気の中、講義に近い赤穂学講演が行われました。参加者の大半が二十歳前後の学生で、熱心にメモを取っていましたが、初めて史実の元禄赤穂事件を聞くのではないかと思われ、少しくも理解してくれればと期待しています。

十一月二十五日は、赤穂市内の史跡を巡りました。赤穂市教育研究所所長の濱田学様と、赤穂市尾崎まちづくり連絡協議会会長の目木敏明様のお二人が車を準備し、案内をして下さいました。

最初は浅野家の菩提寺でもある花岳寺。ここには、浅野家や大石家の墓所、それに赤穂義士の供養墓があります。また、貴重な手紙などの史料や赤穂義士の木像彫刻が展示されています。



高光寺での原惣右衛門直筆の写経見学中

これらを見学した後、高光寺へ向かいました。高光寺には原惣右衛門直筆の法華経の写経があ

ります（一般公開はされておりません）。中央義士会の評議員でもある三好一行任職の案内で、原惣右衛門の写経や原惣右衛門が討入り前に預けたといわれている、持仏の七面天女像（一般公開はされておりません）を拝観させていただきました。いずれも保存状態がよく、当時の姿をそのまま残していました。



高光寺にて

前列右から、濱田さん、坂藤さん、平野さん、筆者、
後列右から、丸山さん、中島代表、三輪さん、
富岡さん、渡邊さん、三好住職、目木さん

次は赤穂城明け渡し後から京都山科へ移るまでの間、大石内蔵助が滞在していた尾崎の「おせど」へ向かいました。おせどは、妹尾孫左衛門の兄、元屋八十右衛門の屋敷があった所で、現在は赤穂市指定史跡となっています。目木様によると、おせどのいわれは、昔は瀬戸内海に面していたところから、「せと」を敬い「お」をつけて「おせと」が「おせど」になったとのこと。

つづいて尾崎八幡宮へ向かいました。ここには、はげの樹があります。この櫛（はげ）の樹は、蝋燭を作るように大石内蔵助が植えたと言えられ、今も何代目かになるはげの樹から蝋燭が作られています。作られた蝋燭は、お宮の社務所の入り口に展示されていました。

八幡宮から、大石内蔵助が元禄十四年六月二十五日に、舟で京都へ出発した船着き場へ行きました。船着き場は御崎の伊和都比売神社から下った海岸にあり、きれいな砂州になっています。ここから大石内蔵助が討入りを胸に秘め、京へ向かったのだと思うと感慨深いものがあります。

次に山を越えて、昔の街並みが残る坂越の奥藤酒造へ行き、それから高取峠へ向かいました。高



おせど



御崎の船着き場
大石内蔵助が出発した場所



尾崎八幡宮
大石内蔵助のはげの樹は、写真右側中程の灯籠の右奥

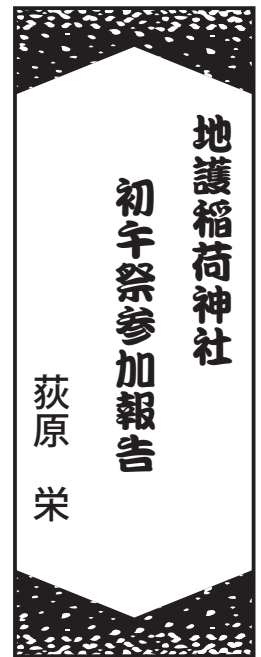
終点は赤穂城の大手門、門前のわたやで忠臣蔵グッズを見て、赤穂駅へ戻り、東京には夜の十時に到着しました。

最後に、車を用意し一日案内をして下さいました。濱田様と目木様に厚く御礼を申し上げます。またこの度、赤穂での二日目に赤穂市長並びに教育長の方々に、中島の歓迎会を開いて下さいましたことに深く感謝しておりますことを御礼申し上げます。



高取峠の旧道
木々の向こうに赤穂市が見えます

取峠には、松之廊下事件を伝える早駕籠の像があり、当時の様子を伝えています。今は車が通るりっぱな道路になっていますが、かつての狭い峠道も残されており、ここを駕籠で行ったのは大変であっただろうと思われました。また、元禄十四年四月十八日には、隣の龍野から、城受取の脇坂淡路守の軍勢がこの峠を越えています。



平成二十八年二月十三日(日)に、台東区上野三丁目にある地護稲荷神社の初午祭が行われました。初午祭の後の直來の時に、中島代表が地護稲荷神社の由来を説明するのに伴い、私も出席させていただきましたので、その模様を紹介いたします。

地護稲荷神社は上野三丁目の下谷神社の直ぐ南側にあり、別名、天野弥五右衛門神社とも言われています。江戸時代元禄期に、旗本天野弥五右衛門の屋敷があった位置に建てられている小さな神社ですが、元々私有地にあり個人的に祀られてきましたが、平成十八年四月一日より地元の町会(上野三丁目)によって祀られ守られており、お祀りが引き継がれています。

天野弥五右衛門は元禄赤穂事件の時に、吉良上野介を訪ね、命を守った烏帽子を大切にするように、と皮肉をいい、また、討入り後の大石内蔵助と会ったと伝えられている人物です。最近、中島代表により、易水連袂録の作者として推定されている、元禄赤穂事件と大変関係の深い人物です。なお、易水連袂録は史料としても重要なものであり、当会から「元禄赤穂事件の記録」として昨年出版されていますので詳しくはそちらをご覧ください。

初午祭は、午後一時に太鼓の合図により開始されました。まず、下谷神社宮司により、祝詞奏上と玉串奉奠が行われた後、参加者全員が玉串奉奠を行い

ました。中島代表と私も参列させていただきました。また、参加者には暖かいお雑煮が振る舞われましたが、当日は、天気も良く初午祭には最適の日となりました。こうして、三百年続いていることが意義深いと思います。その後、町内会事務所を場所を移し、町内会役員の方々が参加する直來の時に、中島代表による天野弥五右衛門についてのお話が有りました。皆さん初めての話しのため大変熱心に聞かれ、質問も沢山出て盛会となりました。



地護稲荷神社



直來の時の中島代表の説明の様子



勢揃いする赤穂義士

忠臣蔵の浮世絵と

赤穂義士の手紙展

坂藤 美子

平成二十七年十二月五日から平成二十八年一月十七日まで『すみだ郷土文化資料館』において、『忠臣蔵の浮世絵と赤穂義士の手紙展』が開催されておりましたので拝見してきました。

墨田区立『すみだ郷土文化資料館』は、郷土文化の理解を深め、郷土意識を高め、文化の発展に資する目的で運営されているそうです。常設的に隅田川の風景のジオラマや東京空襲の体験などが展示されています。墨田区の新名所『スカイツリー』の足元にひっそりとありました。

今回の特集展示はその常設展示のある二階フロアにありました。二階に上がってすぐに手紙が数点展示されているのを見つけました。入門者の私には名前などのごく一部しか読み取れませんが、うれしいことに読み下し文が持ち帰れるように置いてあり、また、受付でいただいたパンフレットには今回展示されている手紙の写真が載せられていて、後々ゆつくりと見ることが可能でした。こういうサービスはありがたいことです。勉強している者にとっては役立つ資料になりますし、他の展示を見にいらした方にも興味を持っていただけ

るなと思いました。

なかでも武林唯七の手紙は二年前にこの資料館が手にいれたものとのことで、父母を案じ、兄に孝行を求める内容が書かれています。時期的には丸山会議のあと、すなわち討ち入りが決定したのちに書かれたものであることがわかります。岡島八十右衛門の兄と原惣右衛門の手紙は同じ中川助左衛門という人物あてに書かれたものです。パンフレットによると、中川助左衛門については不詳、原惣右衛門の親戚筋のものと考えられていると書かれていました。今まで聞いたことのない人物で大変興味深いと思いました。

手紙もそうですが、浮世絵などもこの資料館が収集してきたものだそうで、上下二巻の絵巻物、一メートルほどの両国揃退図、泉岳寺見取り図、いろはになぞらえ当時人気の歌舞伎役者を義士に見立てた人物画などがありました。泉岳寺見取り図は2種類あつて墓の数が違っています。時代の流れの中の2枚なのだということがわかります。両国橋を渡っている絵は二枚あつて、実際には渡っていない旨の解説がついていましたが、橋を配した義士たちは実に絵になるなと思いました。いずれも橋のたもとで奉行に止められた図になっていました。色々な場面に登場人物をキャストイングし、更にお話として大きくなっていった過程がよくわかります。

この企画展はパンフレットや解説書なども置いてあり、小規模ながら、長居できる環境で楽しく

過ごせました。実際ののくらい収集されているのかわかりませんが、区民の収集品をお借りするなど規模を拡大して、毎年展示していただけることを希望します。

赤穂義士討入り満三一三年祭報告

平成二十七年十二月十四日(月)は、赤穂義士討入り満三一三年目に当たり、泉岳寺において、中央義士会主催による赤穂義士追憶の会が催されました。明治四十一年に福本日南翁が創設して以来、今回で百五年目の開催となります。

当日は月曜日でしたが、八十名を越える方々の参加があり、会場は大変賑わいました。

午後二時から泉岳寺本堂において、赤穂義士の法要が行われ、その後本堂横の庫裏において、例会が行われました。まずは、来賓の挨拶に続き、昨年も出演いただき大好評だった神田松之丞氏の講演「大高源五」、今年さらには会場が沸きました。つづいて、中島代表の元禄赤穂事件に関しての講演で史実の忠臣蔵のお話があった後、忠臣蔵検定試験合格者の認定証授与、御子孫の紹介がありました。また、お楽しみ抽選会で豪華賞品などが当たり、今年も盛会裡に幕を閉じました。

今年は例年以上の参加者となったため、いつもの二倍のスペースを利用して戴き、泉岳寺様に御礼を申し上げると共に、ご不便をおかけした皆様にお詫び申し上げます。

また、十二月十二日、十三日には、両国松坂公園付近において、両国町内会による元禄市が開催され、中央義士会も参加し忠臣蔵関係の図書販売を行いました。今年も、元禄市に出店いたしますので、皆様のお越しをお待ちしております。

(文 荻原)



平成27年12月14日 泉岳寺
神田松之丞氏の熱演中

第十六回忠臣蔵愛好会報告

引き揚げコースを歩く

平成二十八年一月三十一日に、恒例の、吉良邸跡から泉岳寺までの赤穂義士引揚げコースを歩く

会が行われました。当日は好天に恵まれたこともあって、およそ四十名の方々が参加されました。

JR両国駅に九時十五分に集合、挨拶と注意事項の説明の後、九時半に出発。吉良邸跡で中島代表の討入り時の様子の説明があり、ここで二つの班に分けて、いよいよ引き揚げコースに出発。コース途中の説明は、富岡、上原、金子、荻原の四名が担当しました。また、到着の泉岳寺と旧細川邸切腹地の説明は中島代表が行いました。コースのおおよそは次の通り。

両国橋—万年橋—永代橋—越前堀児童公園—聖路加タワー（ここで昼食）—浅野家上屋敷跡—築地本願寺—汐留橋—旧新橋停車場跡—日本テレビ前—金杉橋—御田八幡宮—泉岳寺—細川家下屋敷跡。

現代の我々も最新の研究結果を反映し、ほぼ赤穂義士が歩いた道に近いルートを通りました。吉良邸跡から両国橋へ、それから隅田川の東岸を行き、永代橋を渡って、築地へ向かう。聖路加タワー周辺で昼食を取った後、浅野家上屋敷跡から、築地本願寺にある間新六の墓に詣で、汐留シオサイトの旧新橋停車場前、日本テレビ前（仙台藩邸跡）を通り、浜松町の手前で、旧東海道（現国道十五号線）に出ます。その後、一路泉岳寺を目指して進みます。途中金杉橋で休憩し、全員無事に泉岳寺に到着。浅野内匠頭と赤穂義士の墓に詣でた後、通常は入れない細川家下屋敷跡の、大石内蔵助ら十七名の切腹地を見学しました。こころは、

切腹位置が特定されている唯一の場所で、昭和三十三年に中央義士会が整備し、現在は東京都史蹟に指定されています。

今回も、約十二Kmの引き揚げコースを参加者一人も欠けることなく完歩しました。両国を九時半に出発し、途中途中で史蹟の説明やトイレ休憩を取り、昼食をはさんで泉岳寺には午後四時十五分に到着しました。都内は休日とあって、交通量も少なく予定通りの時間で歩ききることができました。

なお、この引揚げコースを歩く前の、一月二十四日に有志により、恒例となっている細川家下屋敷跡の切腹地の清掃を行いました。

(文 荻原)



平成28年1月31日
両国吉良邸前で

浅野内匠頭三一六回忌報告

平成二十八年三月十三日(日)に、浅野内匠頭三一六回忌の法要を、泉岳寺において催されました。

例年三月十四日が平日の場合、直前の日曜日に開催されてきましたので、今年は十三日になりました。四十名の方々の参加がありました。
午後二時から泉岳寺本堂において、浅野内匠頭の法要が行われ、その後本堂横の庫裏において、例会が行われました。まずは、来賓の挨拶として、



平成 28 年 1 月 31 日 旧細川邸
大石らの切腹地の説明

中央義士会名誉会長の浅野長様、中央義士会の会長であった渡辺世祐氏の御子孫渡辺寛様、赤穂の教育研究所所長濱田学様、新潟の武庸会会長嶋谷次郎八様、脚本家の杉山義光様にお言葉をいただきました。続いて、中島代表の「梶川與惣兵衛日記の解説」と題した講演で、松之廊下事件について史料に基づいた話があった後、懇親会に入りました。

懇親会の最初は、御子孫の紹介があり、次にお楽しみ抽選会で豪華賞品などが当たり、今年も盛会裡に幕を閉じました。

また、多くの方が参列したことで、ご不便をおかけしたことをお詫び申し上げます。(文 荻原)



平成 28 年 3 月 13 日 泉岳寺
本堂での法要

第十七回忠臣蔵愛好会の報告

平成二十八年四月二十四日に第十七回目の忠臣蔵愛好会が行われました。今回は、新しい忠臣蔵と題して、神田周辺を巡りました。

当日は、朝方まで雨でどうなるかと思いましたが、昼過ぎには雨も上がり時々太陽も顔を出す、歩くには最適な気候となりました。

総勢二十名が午後一時半にJR御茶ノ水駅聖橋口に集合。中島代表の案内でスタートしました。まずは湯島聖堂。林羅山が開いた孔子を祀る儒



平成 28 年 3 月 13 日 泉岳寺
講演の様

教の学舎です。丁度この日は孔子祭が行われた直後で、大成殿（孔子廟）に運良く入れ、そこで係の女性に丁寧な説明をしていただきました。この建物は関東大震災で焼失し、昭和十年に再建されたものですが、江戸時代のものもいくつか残っていて、そのうちのひとつが、前庭に敷いてある色の変った敷石四枚とのことでした。

続いて天野弥五右衛門邸跡へ行きました。元禄時代の天野弥五右衛門邸は、台東区の下谷神社南側にありましたが、幕末になり神田昌平橋の南側に移転してきました。天野弥五右衛門は、松之廊下の刃傷事件後に吉良上野介に会い、また、大石内蔵助とも会っている人物で、元禄十六年三月にいち早く元禄事件のことを「易水連袂録」として書き残しています。なお、「易水連袂録」は、NPO法人忠臣蔵倶楽部から「元禄赤穂事件の記録」として出版されていますので、そちらをご覧ください。

それから外堀通りを南下、観音坂を西に向かいました。観音坂を挟んで北側が、永井信濃守尚長の屋敷跡で、南側が内藤和泉神忠勝の屋敷跡です。延宝八年六月二十五日、増上寺で四代将軍家綱の法事の最中に、内藤忠勝が永井尚長に刃傷、尚長は絶命、忠勝は次の日に切腹という事件が起こりました。内藤忠勝が浅野内匠頭の伯父にあたるため、一部の作家は、浅野内匠頭の刃傷はこの血が起こしたものであり、内匠頭は統合失調症であると、まことしやかに本に書いています。しかし、



平成 28 年 4 月 24 日 湯島聖堂
入り口の階段を上っています

実際はこの屋敷の位置関係が原因でトラブルを抱えていたため、忠勝が怒って刃傷に及んだとの史料もあり、安易な憶測は慎むべきことです。

続いて幕末に江戸町奉行を務めた、浅野梅堂の屋敷跡へ行きました。浅野梅堂は、赤穂浅野家から分家した旗本で、大石内蔵助とも親戚筋にあたります。なお、現在の中央義士会名誉会長浅野長氏は浅野梅堂の御子孫にあたります。浅野梅堂については、中央義士会から「大石頼母助の系譜」として出版されておりますので、そちらをご覧ください。



湯島聖堂 大成殿前にて

中島代表が四十五年間通い続けた、東京古書会館並びに、元禄事件関係の古書の提供先である文泉堂位置を確認しながら、明治通りに面している大久保彦左衛門邸跡へ行きました。天野弥五右衛門は、元禄時代の大久保彦左衛門とでもいふべき人物である、との中島代表のお話がありました。現在は杏雲堂病院となっております。

その後、午後四時半にJRお茶の水駅に戻って解散となりました。（文 萩原）

第4回忠臣蔵通3級検定試験問題

[申込方法]

・ 解答用紙の請求

検定試験の受験をご希望の方は、住所、氏名、電話番号、FAX番号並びに、第4回3級検定試験申込と記入した用紙を、下記宛てFAXまたは郵送でお送り下さい。FAXをお持ちの方は、できるだけFAXでお願い致します。また、メールでも受け付けております。折り返し解答用紙をお送り致します。

宛先 〒135-0047 東京都江東区富岡1-17-1-403

NPO法人 忠臣蔵倶楽部

TEL/FAX 03-3630-1927

メール office@chuushingura.jp

・ 受験料と振込先

3級の受験料は1000円です。振り込みで受験申込となります。

郵便局の青色の払込取扱票で下記へお振り込みください。

NPO法人 忠臣蔵倶楽部 00190-0-346038

払込取扱票の通信欄に「第4回3級試験申し込み」と記入下さい。

払込料金をご負担をお願いしております。

[解答の送付]

解答はFAXで下記へお送りください。郵送の場合は、下記の中央義士会事務局へお送りください。メールでは受け付けておりませんのでご注意ください。

FAX 048-973-3790

郵送宛先 〒343-0032 埼玉県越谷市袋山 58-12 中央義士会事務局

・ 合否は11月になってからお知らせ致します。

[注意事項]

- ・ 合格点は80点です。24問以上正解で合格となります。
- ・ ご自宅で資料を調べて解答していただいて結構です。
- ・ 試験問題を調べるために、お電話等で各施設へ直接問い合わせることはおやめ下さい。
- ・ 同じく、会員、受験者同士でも試験のための連絡はおやめ下さい。特に申し上げるのは、連絡しあっている方は、同じ答えで間違っているのですぐにわかります。
- ・ 問題をよく読んで、一言一言理解した上で、解答して下さい。問題を読み間違えないようお願い致します。ひっかけ問題も出題されています。
- ・ 中央義士会の過去の出版物でも誤記がありますので充分確認の上、解答して下さい。
- ・ 受験料は締め切りの1ヶ月前までにお納め下さい。
- ・ 最終提出日は、平成28年10月末日です。

平成28年6月

第1問	元禄14年当時、浅野内匠頭は江戸府内に屋敷をいくつ持っていたのでしょうか。 ① 1つ ② 2つ ③ 3つ ④ 4つ
第2問	元禄14年3月14日、梶川與惣兵衛は、どなたのお使いで吉良上野介を探していたのでしょうか。 ① 桂昌院 ② 将軍綱吉 ③ 綱吉正妻 ④ 勅使

第17問	大石内蔵助らが、川崎平間村に着いた時の一行の主人は、どなたでしょうか。 ① 潮田又之丞 ② 菅谷半之丞 ③ 大石内蔵助 ④ 瀬尾孫左衛門
第18問	琴の爪で知られている義士がいますが、次のどなたでしょうか。 ① 矢頭右衛門七 ② 礒貝十郎左衛門 ③ 間十次郎 ④ 竹林唯七
第19問	堀部安兵衛の妻（きち）は、現在どこのお寺に眠っているでしょうか。 ① 泉岳寺 ② 正山寺 ③ 青松寺 ④ 済海寺
第20問	近松勘六の妻は、現在どこに眠っているでしょうか。 ① 大阪市 ② 京都市 ③ 赤穂市 ④ 箕面市
第21問	山鹿流免許者の義士は、どなたでしょうか。 ① 大石内蔵助 ② 菅谷半之丞 ③ 間十次郎 ④ 吉田忠左衛門
第22問	元禄14年当時、大石内蔵助の役職はどれでしょうか。 ① 城代家老 ② 国家老上席 ③ 番頭 ④ 留守居役筆頭
第23問	山鹿素行は、江戸で積徳堂という兵法の道場を持っていましたが、その道場はどこにあったでしょうか。 ① 市ヶ谷 ② 高田馬場 ③ 本所 ④ 浅草
第24問	菅谷半之丞が仮宿していた長福寺はどこにあったでしょうか。 ① 向島 ② 浅草 ③ 谷中 ④ 赤坂
第25問	瑤泉院が大石内蔵助に預けた690両のお金の本質は、何のお金だったでしょうか。 ① 瑤泉院の婚礼持参金 ② 藩の残金 ③ 江戸屋敷の清算金 ④ 6分替の残金
第26問	吉良上野介の名君説の全ての根源になった文章があります。どれでしょうか。 ① 討入り口上書 ② 明治天皇の宣 ③ 赤穂義人録 ④ 元禄快拳録
第27問	「君辱臣死」の言葉で思い出されるお坊さんは次のどなたでしょうか。 ① 祐海 ② 酬山長恩 ③ 誠首座 ④ 良雪
第28問	討入らない浪士は、後に散々な評判を立てられますが「妾に食べさせてもらっている」と噂を立てられた浪士がいます。次のどなたでしょうか。 ① 奥野将監 ② 安井彦右衛門 ③ 近藤源八 ④ 月岡治右衛門
第29問	赤穂四十七士の内、現在全国に17ヶ所の墓所（伝説も含む）がある方がいますが、どなたでしょうか。名前を書いて下さい。 名前 ()
第30問	討入りに際して、逃げた吉良上野介の布団に手を入れた義士がいますが、どなたでしょうか。名前を書いて下さい。 名前 ()

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

役員 **勝田芳造**



家紋「蛇の目」

東京都足立区在住

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

理事 **三輪三郎**

川崎市麻生区在住

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

役員 **金子堅一**

東京都荒川区在住

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

理事 **富岡克**

東京都中央区在住

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

監事 **成清寛徽**

千葉県浦安市在住

NPO 法人忠臣蔵倶楽部

代表代行 **萩原 栄**

NPO 法人のホームページは <http://www.chushingura.net/> です

忠臣蔵と言えば、ドラマ、芝居、小説、町の本屋さんで売っている本、あるいはパソコン上から知ることが多いと思いますが、殆どが実際とは違います。一度私の話を聞いてみませんか。そして貴方の思いもお聞かせ下さい。

代表 **中島 康夫**

080・8908・1633

当会では、毎月一回忠臣蔵に興味のある方々が集って勉強会を行っております。是非作家、俳優、プロデューサー、ディレクター、脚本家の方々の参加もお待ち申しております。勿論一般の方々の参加も大歓迎です。

忠臣蔵倶楽部 世話人 **萩原 栄**

03・3630・1927

編集後記

世は正に、舛添都知事の一件で、毎日物議をかもしているが、舛添さんと吉良上野介の顔がダブってきた。上野介も骨董や美術品に余程興味があったらしく、大名や旗本の屋敷へ伺うと、無償で持ち帰ったことが津軽家の「貞享規範録」にも示されている。持ち帰った骨董品は、あの手この手で金銭に替えていたのである。それほど台所事情が厳しかったのが事実。しかし、虎(徳川家)の威を借る狐(上野介)には、誰も何も言えなかったのである。この事実を、上野介を擁護する作家や吉良町の役場の方々は、どう弁解するのか。泥棒が名君とはあきれて二の句が継げない。どこの部分が名君なのか一日も早く、第三者の調査で証明してほしい。内匠頭をバカ呼ばわり、討入りをテロ呼ばわりするのを止めない限り、我々研究グループも頑張っていくしかない。

編集者

中島康夫(企画・編集・検証)

萩原 栄(編集) 富岡 克(校正)

(株)正大印刷社 (印刷)